

宗教心理学と宗教学の連携のために

藤原聖子 東京大学／日本宗教学会会長

For the Collaboration between the Psychology of Religion and Religious Studies

Satoko FUJIWARA (University of Tokyo/President of the Japanese Association for Religious Studies)

本誌の松島編集委員長から筆者が受けた依頼は「実証的宗教心理学に向けての期待」を述べてもらいたい、「誉めるだけでなく問題点や課題も指摘してほしい」というものだった。背景には、本誌創刊号の「創刊にあたって」（松島, 2023）や「展望」（藤井, 2023）に詳しく述べられているように、宗教心理学、特にその実証的な研究に対する国内の宗教学者の長期にわたる関心の低さがある。事態の打開のために、宗教学側からの意見を聞きたいというのが依頼の趣旨だった。しかし筆者には、宗教心理学と宗教学の連携は、まず宗教学側が変わらなくては実現しないと思われる。よってこの寄稿では、宗教学側の課題を中心に、筆者の考えるところを数点記してみたい。（なお、一般的な宗教学の体系では、宗教心理学は宗教学の下位分野に当たるため、タイトルを「宗教心理学者と、宗教心理学以外の分野の宗教学者との連携」とする方が正確だが、表記が煩瑣にならないよう、「宗教心理学」と「宗教学」という単位で括り、論じていく。）

1. 学部専門教育での連携

まず、宗教学側は、学部教育の段階から宗教心理学について具体的に知る機会を増やすことが必要である。筆者の経験では、宗教学側は宗教心理学に関心がないというよりも、宗教心理学はどのような問いに答えてくれるものなのかをよく知らないのかもしれない。たとえば筆者自身が学部3年次に宗教学専攻に進学した際、もっとも関心があったのは、「なぜ宗教的信仰を持つ人と持たない人がいるのか」だった。ところが、「何に興味があるの？」と聞いてきた宗教学の院生にそう話したところ、その院生に「うーん、宗教学ではそういったことはわからない、問わないと思

うよ」と即答されたため、自分は素朴過ぎたのかと反省して終わったということがあった。

だが、それは今振り返れば視野狭窄だった。というのも、前述の藤井氏の「展望」は、F. Watts, *Psychology, Religion, and Spirituality* (2017)を引用し、「なぜある人は宗教的で、他の人はそうではないのか」は宗教心理学の「研究の出発点となる問い」だと明快に述べているからである（藤井, 2023, p.21）。つまり、宗教心理学は学生の時の私の問題関心への、少なくとも一つの大きな受け皿を提供していたのに、その院生だけでなくおそらく宗教学研究室の誰もがそれを知らなかったのである。

現在も宗教学専攻に進学してくる学生たちの最初の問題関心は、宗教心理学の問いであることが少なくない。かつての私と同じように「なぜ宗教的信仰を持つ人と持たない人がいるのか」を知りたいという学生もいるし、「人はなぜ宗教を信じるのか」という根本的なことが気になる」「悟りの境地とはどのようなものか」「宗教は人を幸せにしたのか」「なぜ特に信仰を持っていない人が多い日本において神社に参拝する（しかも熱心に祈る）人が多いのか」「苦痛を伴う厳しい修行に耐えられるのは信仰心の強さによるのか」等々、必ずしも心理学・認知科学だけで答えが出るわけではなくても、その視点抜きには十分に取組めない問いを抱いた学生たちがいる。これまでそういった学生に対しては、その問いは宗教学では扱わないと告げてテーマを変えさせるか、それは宗教社会学の研究だなどと言って心理学とは別の分野に誘導するかという指導をしてきたのである。

この状況を変えるには、宗教心理学の専門家による授業を開講する、あるいは学内に心理学専攻が存在すれば、授業を介した連携を

試みるなどの方策が考えられる。しかしそのためには、宗教学の教員側にそれが必要だという意識が生まれなければならない。これについては、筆者の見るところ、現在、心理学への関心は宗教学にとって特に次の点において極めて重要なものになっている。

2. 宗教学の「方法論的転回」

宗教学者に広く宗教心理学の意義を訴えるには、それに付加価値を加えると効果的であろう。すなわち、既に存在が知られている分野である宗教心理学に対して、それが宗教研究の一分野だから連携するということに留まらない、より積極的で新しい理由付けである。

心理学側の研究者には意外かもしれないが、近年、宗教学では研究方法に対する関心が国際的に高まっている。宗教研究の多様な方法を整理・解説した Engler & Stausberg (2022) による *The Routledge Handbook of Research Methods in the Study of Religion* はその嚆矢である。2011 年の初版が話題になった後、内容をより充実させた第二版が一昨年刊行された。目的は、宗教学の学生・院生に宗教研究にはどのような方法が存在するのかを教え、なじみのない方法への関心を刺激し、さらに研究を進める上で自分の方法を評価（自己点検）するやり方を示すというものである。もちろん、これまでの宗教学者が方法論に無頓着だったということは全くないのだが、本書で取り上げられている研究方法のいくつかは、宗教学者からは執筆者を十分に調達できず、他分野、特に心理学者の協力を得たという。

紹介されている研究方法や技術(手法)は、アルファベット順に並べれば以下の通りである。1つの方法につき1章が当てられている。

個別研究方法

1. autoethnography
2. computational text analysis
3. content analysis
4. conversation analysis
5. diary studies
6. digital ethnography
7. discourse analysis
8. document analysis
9. experimental methods

10. field research
11. grounded theory
12. hermeneutics
13. history
14. interview methods
15. microhistory
16. network analysis
17. phenomenology
18. philology
19. reading images
20. semiotics
21. sequence analysis
22. surveys and questionnaires
23. translation
24. videography

技術

1. coding
2. event model analysis
3. focus groups
4. free-listing
5. photo elicitation
6. semantic differential
7. survey experiments
8. survey item validation

宗教学の古典的な研究方法は、テキスト(特に歴史資料)を読み解釈する、フィールドワークをするといった質的方法である。その分野でもオートエスノグラフィ (1) やマイクロヒストリー (15) といった新しい方法が現われているが、リストの半分以上は、おそらく日本宗教学会会員の多数にとってはなじみがない、聞いたこともない方法である。その多くは心理学か、計量的テキスト分析を中心とするデジタル・ヒューマニティーズで用いられる方法なのである。心理学者(社会心理・教育心理を含む)や認知科学者が執筆に関わっている章をイタリックで示したが、特に実験に関わるものはそのような章である。また、社会学者が担当した定性的方法、たとえばフォーカス・グループ(技術の3)などは心理学でもよく用いられるものである。何よりも、この個別研究方法リストに先立つ総論の中の、リサーチ・デザインという重要な章は、心理学者と認知科学系宗教学者の共著であること

が、宗教学の方法に注目する議論はいまや、心理学抜きには成り立たないことを示している。

この動向の意味するところは大きい。第一に、宗教心理学を取り入れるとは、ただ研究対象に「心理」が加わったということではなく、汎用性の高い新たな研究方法を吸収することだということ。テキストを読むという方法しか学んだことのない学生・院生の選択は、思想研究や歴史研究に限られる。使える方法が他にも多数存在していることを学べば、選択肢が広がる。第二に、これまで宗教学者の多くが〈見よう見まね〉と〈勘〉に頼ってきた研究の組み立て方を、心理学者はリサーチ・デザインとしてメソッド化していたということに遅まきながら中心的な宗教学者たちが気づいた、あるいは真剣に受け止め始めたのだということ。心理学、あるいはより自然科学に近いモデルに人文学系の宗教学者が一方的に合わせる必要はないにしても、心理学ではどう行われるものかを知ることは、自分の研究の組み立て方を自己点検する上で大いに役立つ。

この高まりつつある動向を宗教学における「方法論的転回」と名付け、心理学との連携は、宗教学会で長らく空席だった宗教心理学の座を埋めるだけでなく、研究方法を広げるとともにそれへの反省を深めるとして意義を訴えることができそうである。知りたい問いに答えを出してくれそうな研究がある、あるいは自分の研究をよりソリッドなものにしたい、という観点から心理学にアプローチする可能性である。

3. 理論をめぐる議論の活性化

宗教学者に広く宗教心理学の意義を伝えるには、理論や新しい研究動向に敏感な者、特に若手の発信力も鍵である。欧米においては認知科学や進化心理学を取り入れた宗教学（宗教認知科学）は20世紀末から急速に進展した。日本の宗教学では数人の専門家を除き、未だ十分に知られていないが、認知科学を勉強しなくてはと思っている層は潜在的には存在する。国際的なジャーナルの論文には、宗教認知科学についての知識を前提としたものが多数掲載されるようになってきているためであ

る。昨年、R・ダンバーの『宗教の起源』(Dunbar, 2022)の邦訳が出版されるやベストセラーになったように、一般社会の関心も高いとあってはなおさらである。理論や新しい研究動向に敏感な者は他の研究者に対してインフルエンサーにもなりやすいため、そのような人たちが心理学・認知科学に興味を持つならば大きな変化が生じうる。

そのためには、宗教認知科学が盛んな欧米の宗教学においてもこれに対する評価は分かれており、論争も起きていることを、伏せるよりもむしろ示して興味をひくという手がある。つまり、日本において導入が遅れたことをむしろ逆手にとり、宗教認知科学は四半世紀以上経った現在どう評価されているのか、どのような批判があるのか、批判に対してどのような反論や問題の克服がなされているのかまでをまとめて示すのである。既に藤井(2023)において基礎的な紹介はなされているが、筆者の知る限り、*Studi e Materiali di Storia delle Religioni*において2019～2020年にかけてなされた論争は国際的に話題になったもので、日本の宗教学でも参照する価値が高い。これは理論宗教学（批判理論やポストモダン・ポストコロニアル理論を取り入れた宗教学）と宗教認知科学のそれぞれの御所であるI・ストレンスキーとA・ギアーツの間で戦わされたものである。ストレンスキーが宗教認知科学はつまらないしこれまでの理論宗教学の成果を無視しているときき下ろすのに対して、ギアーツはそれは認知科学への無理解から来るものだとして丁寧な反論している(Geertz, 2020; Strenski, 2018, 2019; Testa, 2019)。

ストレンスキーからの宗教認知科学への主な批判点は、

- ・「宗教」概念の構築性を考慮せず、実体化している（超自然的存在を信じることを「宗教」と定義しており、そのようなキリスト教的「宗教」概念を用いることについて反省がない。したがって、その「宗教」の普遍性を訴えても意味がない）。
- ・「科学」のとらえ方が狭い。あるいは、反証不可能な研究であり、科学とは言えない。実験室の研究でわかることは限られている。
- ・研究意義に乏しい。

この例としてストレンスキーが挙げているのは、主の祈りを唱えたときとサンタ・クロースにお願いをしたときでは、同じ祈りの行為でも脳の異なる個所が反応することを解明した、ギアーツの実験。それがわかって何になるのかという疑問である。より一般的には、宗教認知科学は、「祈る時になぜ人は手を合わせるのか」について、そのように脳にインプットされているからだと説明するが、そのような発見が重要とは思えないという。ストレンスキーがそれよりも意義ある説明として出す例は、マルク・ブロックの歴史学的研究である。ブロックは、人間が祈る時に手を合わせ跪くのは、封建社会の主人と家臣の関係に基づき神と人間の関係が作られたからだと言ったが、この説明は私たちの物の見方を変えるインパクトがあり、意義があるとストレンスキーはいう。

- 以上の問題点にもかかわらず宗教認知科学が続いているのは、超越的存在は実在しないのだから、宗教は幻想だと主張したいからである。つまり、宗教認知科学は科学であるどころか、無神論を広めるイデオロギーにすぎない。

これに対するギアーツの反論は

- 宗教認知科学は多様である。超自然的な存在についての表象だけを研究しているのではなく、道徳、道徳的行動、無神論、自我とアイデンティティの概念、ジェンダー、権力関係、説得、死と死者、暴力、極端な儀礼的行動、生まれ変わり、神秘主義といった沢山のトピックを研究している。
- 反証可能性はあるし、フィールドワークを踏まえて実験的研究を行っている者もいる。たとえば B. Purzycki は、先住民宗教には道徳的な神 (Big Gods) は存在しないという説に対して、フィールドワークと通文化的調査に基づき、批判を展開した。
- むしろ人文学では立てるだけで検証できなかった仮説を宗教認知科学は検証することができる。ビッグ・データ&デジタル・アプローチ、コンピューターを用いたシミュレーション・モデリングなどが革新をもたらしている。

- 宗教概念については、因果的メカニズムを探究するために、「宗教」をいくつかの構成要素に分解するという方法をとっている。つまり、宗教概念についても洗練された議論を行っている。
- 宗教学者は宗教観念や儀礼には関心があるが、人間には関心がない、すなわち、人間を動機づける心理的しくみを理解せず、単に「宗教的な意図により動機づけられた」という説明で済ませているが、それでは中途半端である。
- ストレンスキーが意義に乏しいと一蹴したギアーツの実験は、祈りは脳の様々な領域に関わっていることを発見したもので、それまでの説 (アメリカの神経神学者には、脳の特定の部分が「宗教体験」に対応していると論じる者が多い) を覆すものだった。また、(主の祈りとサンタへの祈りで脳の反応箇所が違うという指摘だけでなく) 催眠の解明、宗教的権威や暗示の脳への影響を解明することに繋がるものだった。ギアーツから見れば、ブロックの研究例の方がむしろつまらない。

といったものであり、締めくくりに、宗教認知科学者は、認知科学が他の方法にとって代わる唯一の科学だと主張しているわけではなく、他の方法による宗教研究との連携を望んでいると結んでいる。

日本でも、宗教認知科学には興味をもてないという反応をする宗教学者は、少なからずストレンスキーと同様の印象を抱いているようである。ギアーツが紹介しているが、J・ハーバーマス (Habermas, 2019) が認知心理学者 M・トマセロに依拠して展開している研究は、そのような宗教学者にとって大きな刺激になるのではないだろうか。

4. 規範性問題については相互批評を

3 の論争の中心にある宗教認知科学と宗教心理学には、宗教学から見れば規範性に関して大きな違いも存在する。宗教認知科学の方は、ストレンスキーの批判にあるように、還元主義的傾向が強い。例外はあるが、ほとんどの認知科学者は、神は人間が進化の過程で作出したものだと言明づけるためである。それに比べると、宗教心理学には信仰をもつ

研究者が従事する割合が高い。これは欧米でも日本でもそうである。宗教学は、19世紀以降、キリスト教神学から差異化することで自己形成を果たしてきたという経緯がある。このため、信仰に基づく学と、信仰とは切り離し、方法論的無神論（不可知論）に立つ学を分け、後者のみを宗教学とみなすことが多い。このことも、宗教心理学と宗教学を分かち壁の一因であると思われる。

宗教心理学側にはそのような違いがあるという認識はあまりないのかもしれないが、たとえば教育学系の宗教心理学者が、宗教教育の推進に役立つ研究を行うというのは、自然なことであろう。だがそれは、筆者を含む多くの宗教学者にとっては規範的すぎる研究であることが多い。宗教はよいものであり、特定の宗教心を育成することは望ましいという前提があるためである。また、精神面の健常／病理の判断に関わる研究も規範性を帯びやすい。一例を挙げれば、松島氏等（渡辺他, 2021）によるヌミノース体験（宗教体験）についての研究がある。ある大学生の、神の存在を確信する根拠となった体験を対象とするのだが、それを精神病症状なのか、ヌミノース体験なのかを見極める研究である。事例は宗教学者にもきわめて興味深いものの、研究者が、真正なるヌミノース体験は存在するという前提で研究しているところが宗教学とは違う。宗教学では、そのような体験があるかないかについては判断を行わない、または真正な宗教体験とそうではない体験の区別は客観的には困難であると考えた方が多いためである。このように研究の前提や目的が異なると、連携は容易ではない。

だが、信仰や真理要求から研究を切り離す宗教学者に何も規範性はないのかといえばそのようなことはない。また、わかりやすい真偽判断や価値判断を避けることによって、宗教学者側に盲点が生じている場合もあるだろう。よってこの規範性問題については、違いゆえに互いから遠ざかるのではなく、それを相互批評の契機とすることも可能と思われる。あるいは、時事的なトピックで規範性が否応なく絡むもの、たとえばいわゆるマインドコントロールについて、現在の国際的水準での研究・議論はどのようなものかを知りたいと

いう者は、研究者にも社会にも多いに違くない。そのような研究は宗教心理学者と宗教学者の連携により、より多角的な視点を確保しながら行うことが望ましい。

連携に向けて

以上のように考えるならば、宗教心理学と宗教学の連携はお互いの学の活性化に必ずつながる。本誌の創刊はそれに向けての大きな一歩であり、刺激的な交流の場として歓迎したい。

引用文献

- Dunbar, R. (2022). *How Religion Evolved: And Why It Endures*. Pelican Books.
- Engler, S. & Stausberg, M. (2022). *The Routledge Handbook of Research Methods in the Study of Religion* (2nd ed.). Routledge.
- 藤井修平(2023). 宗教心理学の展望——分野の構成, 研究テーマ, 課題の分析 宗教／スピリチュアリティ心理学研究, 1, 18-32.
- Geertz, A. (2020). How Did Ignorance Become Fact in American Religious Studies?: A Reluctant Reply to Ivan Strenski. *Studi e Materiali di Storia delle Religioni*, 86(1), 365-403.
- Habermas, J. (2019). *Auch eine Geschichte der Philosophie* (Vols. 1-2). Suhrkamp.
- 松島公望(2023). 日本における実証的宗教心理学は進展している 宗教／スピリチュアリティ心理学研究, 1, 1-2.
- Strenski, I. (2018). What Can the Failure of Cog-Sci of Religion Teach Us about the Future of Religious Studies? In J. N. Blum (Ed.), *The Question of Methodological Naturalism* (Supplements to Method & Theory in the Study of Religion 11), 206–221.
- Strenski, I. (2019). Much Ado about Quite a Lot: a Response to Alessandro Testa's Review of Strenski, *Understanding Theories of Religion*. *Studi e Materiali di Storia delle Religioni*, 85(1), 365–388.
- Testa, A. (2019). Religion: Evolutionism,

Modernism, Postmodernism; What Comes Next? A Review Essay of Ivan Strenski's *Understanding Theories of Religion: An Introduction. Studi e Materiali di Storia delle Religioni*, 85(1), 342-364.

渡辺慶一郎・松島公望・浦上涼子 (2021). ミノース体験を呈した大学生の一例. *精神科治療学*, 36(10), 1203-1208.

— 2024. 02. 23 受稿, 2024. 03. 03 受理 —